

熱心に議論する学生

アジア共同学位開発プロジェクト 東北大教育学研究科がサマーコース

東北大学大学院教育学研究科では、「アジア共同学位開発プロジェクト」の一環として、同事業のサマーコースをこの夏8日間にわたり東北大文科系総合研究棟を会場に開催した。

最終日には「アジアにおける共通の教育」をテーマにグループごとに発表し、アジア共通の課題や各国の差異についてさまざまな観点から意見が交わされた。

また、サマーコース期間中には日本の中学校・高校でフィールドワークを実施し、外国人の目を通して、日本の教育現場をあらためて見ることで、これまで気づけなかった日本の教育の良さ、あるいは学校現場が持つ課題の共通性について理解を深めた。



修了式



各国大学からサマーコースに参加した学生と講師

今回の試みであるサマーコースでは、東北大学の大学院生をはじめ、中国、韓国、台湾から11名の大学院生が参加。「アジアの子ども」「アジアの学校」をテーマとした2講義を短期集中で受講した。

各講義も中国や韓国、台湾、日本の教員が担当し、それぞれが寄せられた。

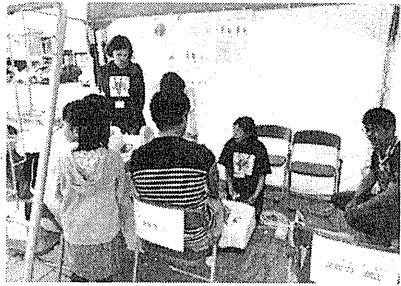
参加した学生からは、異なる国あるいは文化を持った学生、教員と交流ができたことで自分にはなかった課題意識を持つことができた、価値観を共有することができたなどの声が寄せられた。

いずれの取り組みも今後、プロジェクトを推進する上で大いに有意義なものとなった。

地元まつりで石引よろず保健室を開室(金沢大)

金沢大学医薬保健研究域附属健康増進科学センターは去る9月23日、市内で行われた地元のまつりに、「石引よろず保健室」を出張開室した。

石引よろず保健室は、健康に関して地域住民と教員・学生が気軽に交流することで、地域に根差した健康増進科学を創ることを目的としている。普段は筋力測定や体組成測定など、医師・看護師による健康相談、また毎週木曜日は健康体操を実施している。今回は、よろず保健室サポーター2名がまつりに訪れた地域住民の血圧、足の指を握ったり伸ばしたりする力の足趾力(そくしりよく)測定、骨密度測定と健康相談を実施。小さな子どもから高齢者まで、平日はなかなか保健室を利用することができない市民も含め、約100名が来室した。



健康測定に訪れた家族連れに対応するサポーター

アジア共同学位開発プロジェクト 東北大が国際シンポ「国際的共同学位の構想」

東北大学大学院教育学研究科では、「アジア共同学位開発プロジェクト」の一環として、アジア共同学位開発プロジェクト国際シンポジウムを東北大文科系総合研究棟を会場として開催した。

平成24年度の1回目となる今回のシンポジウムでは、「国際的共同学位の構想―国際化時代に対応した人材育成」と題して、東アジアの高等教育機関で教鞭をとる11人の講師を招き、国際化時代に対応した人材育成のあり方について討論した。

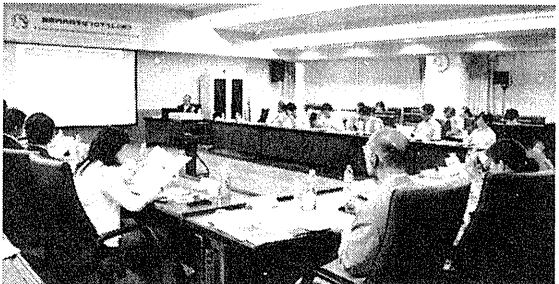
シンポジウムは、本郷一夫教育学研究科長の挨拶に続き、ヨーロッパ高等教育研究の第一人者であるウルリッヒ・タイヒラー教授から、高等教育における流動性についてヨーロッパの経験を通じた基調講演が行われた。また講演後には、各大学から国際化時代に対応した人材育成への取り組みについて報告があり、フロアを交えて活発に討論した。

ヨーロッパでは、エラスムスやエラスムスンドゥスのようにこれまで40年近くカリキュラム統合と組織化された留学の枠

組みのなかで、域内移動が支援され、ヨーロッパ市民の育成あるいはヨーロッパの経済を支える人材育成が展開されてきた。

中国、韓国、台湾のいずれの国や地域の大学でも、国際化時代に対応する人材が備えるべき資質を明確にし、資質を向上させる教育プログラムを開発している。

挨拶する本郷研究科長



活発に意見が交わされたシンポジウム

石巻で産科救急教育プログラム(東北大)

東北大学の東北メディカル・メガバンク機構は、石巻赤十字病院で産科救急のための教育プログラムを実施した。今回行ったのは、医師らが周産期救急に効果的に対処できる知識や能力を発展・維持するための教育コースとして行っている。

たとえば、中国の大学ではAPIC(Academic, Practical, International, Creative)型の人材育成を進めている。一方、台湾の大学ではPersonal, Societal, Interdisciplinaryの5つの資質を備えた人材育成を進めている。同プロジェクトでも、4つの資質、すなわちKASP(Knowledge, Attitude, Skill, Practice)を掲げているが、東アジアでは、国際的な感覚・態度、社会性はもとより、専門的な知をいかに構築していくかが共通の課題として浮かび上がった。

討論では、アジア共同学位開発プロジェクトが、果たして誰のためのものであり(Who)、なぜ東アジアで必要なのか(Why)、具体的にどのようなプログラムを提供するのか(What)、さらに、いかにして共同プログラムを運営するのか(How)などについて、各大学あるいは各国の事情をもとに討論された。いずれの意見も、今後、プロジェクトを推進するうえで有意義なものであった。



各海外大学の講師と東北大関係者